

## コラム「ブラジルの素顔」

「普通は〇〇だよな」という考え方が、なかなか通用しないのがブラジルです・・・

2021年1月

三井住友銀行 加藤 巖

### 「ブラジルの“普通”って何？シリーズ 第3弾 / 嗚呼ブラジル、ブラジル研修からの学び その1」

社会人デビューをした翌々年の1989年から約1年間、サンパウロ州の北方にあるミナス・ジェライス州の州都ベロ・オリゾンテ市に、研修生として派遣されました。研修ミッションは州立カトリック大学の聴講生をしながら、州立開発銀行で実地研修を受け、語学・文化等を経験して無事に帰国することと説明を受けました。その言葉を真に受けた脳天気な社会人3年生が“伸び伸び”と研修生活を始めた訳ですが、当時の生活から大小のブラジル・ヒントを得ていた気がするので、今号と次号でその一部をご披露させて頂こうと思います。

社会人研修生とは言えば聞こえはいいのですが、まだ社会経験があまりない人間が24時間以上も単独飛行機でブラジルまで行って、生活をする事自体が大冒険ということで張り切っていたところ、最初から躓きました。この研修前、遡ることサンパウロのインターナショナルスクールに在学中の中学2年生のときに、当時のブラジルは軍事政権だったので輸入規制から輸入品がかなり高価だったこと、良質の物資が手に入り難かったこと、また治安も悪かったことを覚えていました。当時の経験でブラジルのことを理解したつもりになっていた私は、「研修中はなるべく治安のよいゴルフ場で健康的な研修生活をしよう！」とゴルフセットが必須だと(勝手に)考えて行動しました。空港にゴルフバッグを担いで意気揚々と登場した私をみて、迎えに来てくれた先輩社員は「遊びに来たの?!」と怒り、コテンパンな状態で研修が始まったわけです。

しかし、そのゴルフバッグですが、研修中の週末は市中も閑散としていて不気味だったので、ゴルフ場が併設されたスポーツクラブへ通うようにしたところ、アッパーミドル層との人脈構築ができて、体力もつき、治安の悪いところから回避もできたため、結果として極めて高い効果が発揮されました。

嗚呼ブラジルです。

その到着初日の夜は弊社ブラジル現法サンパウロ本店の先輩社員方から歓迎会をしていただき、翌朝には時差でフラフラになりながら、右も左も分からないなか、今度は国内線でベロ・オリゾンテ市に飛びました。今となってはどのようにして空港から下宿先のダウバ家に辿り着いたのか全く記憶がないのですが、住居は治安面を重視したブラジル都市部中心地に多いアパートスタイルではなく、戸建に居候をさせて貰う、所謂下宿スタイル

の生活が始まったのです。

### 【下宿先ダウバ家】

当時弊行ブラジル現法は、ペロ・オリゾンテ市に支店を構えていたことから、その支店の先輩が「まずは主人と家賃について交渉すべし」と指示してきたので、到着してすぐに家賃交渉をしました。家賃は毎月発表されていたインフレ計数および月末為替をもとに毎月値上がっていく契約になっていて、私はその2つの要素から算出した家賃代金を月末に翌月分として小切手でダウバさんに渡すことにしました。インフレが激しいため、先払いが絶対条件だったのは日本と違う点でした。

家賃には部屋やシャワーの使用料、光熱費、国内電話使用料のほかに朝食費までが含まれ、朝食は「目玉焼きひとつとパン、コーヒー、オレンジジュース等」という詳細な内容でした。それゆえありがたいことに下宿開始の翌朝から、この朝食セットが食卓に並んだわけです。しかし残念なことに目玉焼きが油に浮いた状態でした。

最初の数日は「明日こそは改善されるだろうから、今日は我慢しよう」と考えていたのですが、流石に毎朝、油に浮いた目玉焼きを提供され続けたので、温厚な私も1週間ぐらい経過したところで台所に入っていき、油は少なめ、半熟仕上げの目玉焼きを作り、ダウバさんに「明日からはこのようにしてくれ」と目玉焼きを示したのです。ただその時、フライパンから皿にのせる際に目玉焼きの端っこが少しばかり折れていました……。

すると、なんと見事にその日以降、毎朝、毎朝、目玉焼きの端っこが少しばかり、でも確実にひっくり返って食卓に並んできたのです。この繰り返しの作業は天下一品でした。

嗚呼、愛すべきブラジルです。

### 【インフレーション】

当時のブラジルでは、たとえば100円くらいのお菓子をスーパーマーケットで買う時でも小切手を使用していました。現在のブラジルはクレジットカード決済、フィンテックの盛り上がり等の影響もあり小切手はすっかり影を潜めています。これはスマートフォン、パソコンの普及や現金を持ち歩くりスク回避、また紙幣が汚いことがあると思います。当時の紙幣はセロテープで切れ目を留めている状態はあたり前で、余白にメモ、いたずら書きが残されている紙幣も多かったのです。またすべての紙幣の腰が弱く、フニャフニャでした。こんな点から循環型のATM(現金自動支払機)の普及がなかなか進まない理由があると思われれます。

加えてインフレ急進によるデノミネーションのため、写真のように判子が押されている紙幣と、押されていない紙幣が混在する混乱ぶりでした。更には判子を押すのが間に合わず、100,000クルゼイロ札がそのまま100クルゼード札として、かつクルゼイロ札とクルゼード札が混在流通していました。通っていた大学の経済学部の友人は判子を押す機械も買えない、人も雇えない財源不足だ、と嘆いていました。

### <当時流通していた紙幣の例>



<出所:ブラジル中央銀行>

#### 【ブラジル人】

インターナショナルスクールに通っていた頃の私は、子どもだったので、あたり前ですが親の庇護のもとで生活していました。しかし、この研修では親は勿論、会社からの庇護がないなかで生活をするため、すべてを自分で解決する必要があったことから、いろいろと見えてくるものがありました。正直なところ「ブラジル人は怠け者では？」という大いなる誤解が解けた期間でもありました。研修の数年後に駐在としてサンパウロで数回勤務をしたのですが、日本企業の工場長・マネージメントからは異口同音に「ブラジル人は真面目で、よく働いてくれます」というコメントを聞きました。

日本人は今でこそ、欧米スタイル同様に権利・主張をすることが普通になりつつありますが、昔はそんなことはなく、例え給与が少なくても、与えられた職場で頼まれもしない残業を精一杯こなす人が大半であり、その結果第二次世界大戦で焼け野原となってしまった日本が急激に世界有数の経済大国に復活したものと理解しています。ここがブラジルを誤解してしまうポイントかもしれません。

ブラジルは賃金階層によってやるべき仕事が明快に分かれているということを実地で学ばせて貰ったわけです。たとえばダウバお婆さんのように決まった作業をしてもらうとすれば、天下一品な質の高い作業を継続できるのです。ここからの教訓では、日本人の好む「給料が安くて、空気を読むできがよい社員」は存在しないということです。

これも嗚呼、ブラジルです。

#### 【自動車】

当時の研修生は自家用車保有が禁止されていたのですが、治安面とタクシーに乗ると蚤が付く可能性があったことから会社の許可を取って購入しました。購入した自動車でもたまた不思議な体験をしたのです。

すでにフォルクスワーゲンがブラジルで大規模生産をしていて市場占有率も高かったこともあり、お手頃だった中古のパスアット(ブラジルではパサッチと呼ばれている)を3,000米ドルぐらいで購入しました。当時の為替水準は覚えていませんが、約1年後の帰国時には急激なインフレにより米ドルベースで値上がりして売却できたのです！日本だと少し乗っただけで半額になってしまうところですよ。

さらにおまけの自動車ネタです。パサッチくんを駐車していたところ、予兆なく前輪の車軸が金属疲労で折れたことがありました。修理工場のお兄ちゃんは



当レポートに掲載されているあらゆる内容の無断転載・複製を禁じます。当レポートは単に情報提供を目的に作成されており、その正確性を当行及び情報提供元が保証するものではなく、また掲載された内容は経済情勢等の変化により変更される事があります。本レポート中の見解は執筆者のものであり、当行としての見解ではありません。掲載情報は利用者の責任と判断でご利用頂き、また個別の案件につきましては法律・会計・税務等の各面の専門家にご相談下さるようお願い致します。万一、利用者が当情報の利用に関して損害を被った場合、当行及び情報提供元はその原因の如何を問わず賠償の責を負いません。

「よくあることだよ。ちゃんと修理したら大丈夫だから安心しな」とコメントしていました。世界のフォルクスワーゲン製でもこんなことが「普通」だったのです。（出所：Volkswagen Passat / wikipedia フリー百科事典）

自動車つながりということで、次は免許について。

今でもそうですが、ブラジルでは日本発行の国際運転免許証は無効です。それを知っていながら、ダメもとで私は一応持参したところ、交渉の甲斐あり(でも紆余曲折の末)指定されたクリニックへ出向くことに成功し、運転免許証取得のためのテストを受けることができたのです。するとその検査項目には日本では行わない握力検査がありました。学生時代に武道をやっていたことから腕に多少の自信があった私はむきになって満身の力で握ったところ「お～凄い、凄い！！」と医者に褒められ、無事に合格しました。不思議に思ったので、握力検査の理由を尋ねたところ「握力が弱い人がいるからだよ」と優しく教えてくれました。

これも嗚呼、ブラジルです。

免許関連でもうひとつお伝えしますと、免許証を発行するミナス・ジェライス州交通局に行ったところ、通っていた大学の友人が担当官として働いていました。当時の交通局のルールは知り得ませんが、彼は私の査証の残存期間＝滞在期間以上有効の免許証を発給してくれたのです。これも古き良き時代のブラジルといえるでしょう。

嗚呼ブラジル、持つべきものは友です。

今思い返すと、砂利の駐車場で学生時代に体得した武道を披露するために黒帯を締めて、拳立てや稽古をしました。本人的には「トロンバ」と称される強盗に狙われないようにという配慮からの行動でしたが、結果はブラジル人の子どもたちが輪になって集まり、ブラジルで大人気になってゴールデンタイムに放映されていた日本の特撮ヒーロー番組の影響を目のあたりにすることができただけでした。

今でも彼らの「おー、ジャスピオン！！(上述特撮ヒーローの名前)」と騒ぐ姿や声を覚えています。日本では黒帯を締めて稽古するのは決して珍しいことではありませんが、ブラジルではすごい人への呼称が「ジャスピオン」となっているほど日本人への敬愛が根付いていて、それを実地で感じることができました。こうして普通ではない普通を日々体感し、奮闘する研修が続いていったわけです。

嗚呼、ブラジルです。

加藤 巖（かとう いわお）

1987年上智大学外国語学部ポルトガル語学科卒業。同年住友銀行（現三井住友銀行）入行  
89-90年ブラジル業務研修生（Minas Gerais 州立カトリック大学聴講生）、東京営業部、  
国際審査部、JCIF国際金融情報センター出向、ブラジル住友銀行（現ブラジル三井住友銀行）、  
グローバル・アドバイザー一部等を経て、2016年9月からブラジル・サンパウロに駐在して主に  
日本企業の持つニーズへの対応及びM&Aのソーシング/アドバイザー業務に従事。  
2019年4月末に再びグローバル・アドバイザー一部に帰任、中南米におけるビジネス展開に  
対する各種アドバイザー業務に従事中。

「中南米における自国通貨のドル化の背景とその実効性/アルゼンチン」

（国際金融情報センター／大蔵省委託調査）

「変動する世界の金融・資本市場（アルゼンチン）」（金融財政事情研究会）

「日本企業がブラジルと上手に付き合うために必要なこと」（日本ブラジル中央協会）

「新ブラジル事典／第4章：金融業」（ブラジル日本商工会議所編）、等の執筆多数

「特集ブラジル経済と不動産市場の行方」（AREAS不動産証券化ジャーナル/2016年31号）対談  
ブラジルの情報交換会 CdNB 日本ブラジル・クラブ（Clube do Nipo-Brasileiro）を共同主宰  
日本機械輸出組合主催「ブラジル進出支援セミナー」

播磨国際協議会主催「ブラジル経済情勢」

上田市3商工団体共催「海外展開セミナー」セミナー講師多数